
東方光闇録

DARK 0(元 レア)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方光闇錄

【Zコード】

N1053S

【作者名】

DARK 〇(元 レア)

【あらすじ】

自分の中にある光と闇。どちらが本当でどちらが嘘か。高校生神部黒央は幻想の地にて何を見るのか

始まり（前書き）

再出発です。以前モバゲーに投稿していた作品を「ひかりでやり直す」としました。

最初の部分を少し変更して、あとは依然と同じようなストーリー展開で何とか完結まで持つていただきたいと思います。

初めて読まれる方も、そうでない方もこれからどうぞよろしくお願ひします。

始まり

世界は往々にして理不尽なものである。

それに気づくか気づかないかはその人の生き方次第。

田を背け、背を向けて、自分の良いように解釈し続ける。

それが出来る人は恐らくいつも明るく、そして運よく生きていける
ことができるのだろう。

しかし、そんな人間ばかりでないのがこの世の理といつものである。

個人的な意見を言つなれば、もし世界がそんな人間ばかり皆が前向きで、皆が明日に目標を見出して生きているならばそんな世界は恐ろしく氣味が悪い。

世界はバランス。

正があれば負があつて、勝ちがあれば負けがあつて、光があれば闇がある。

そうやって世界は真ん中という基準を作つてゐるから、個体によつて差が出来て面白い。

まあ、完璧に自論ではあるのだが。

そこで最初の話に戻る。

世界は往々にして理不^{分明}。

これはつまり、時として自分が望む望まないに関わらずそのバラン
ス　いわば世界の帳尻合わせにつき合わされた事を悟るというこ
とだと俺は思つてゐる。

それが落し物をした時の事なのか、厄介な事件に巻き込まれた時
事なのかは、まあその人の感覚の問題なのだろうけど。

とにかく、これはそういうお話である。

世界なんて言うスケールのでかいものに全てを押し付ける訳ではな
いけれど、始まりは何とも理不尽極まりない事だったということだ
けは声を大にして言つておく。

黒田市。

俺の住んでいいる市の名前である。

市の中心部には都心顔負けのビル群が立ち並び、娯楽施設も多く存
在する一方、少しでも郊外に足を運ぶとアスファルトが田畠に変化
し、ビルの代わりに多くの木々などの自然が顔を見せるへンテコ都
市である。

中心部を囲うように大自然が原生していることから、近年日本の新

しい都市像として”革新都市”と呼ばれているらしい。

住んでる身としては慣れ親しんでいるからか、とても大仰な文句に聞こえるのであるが、客観的な立場からの意見のほうが理には適つているためそれに対してもやめておく。

さて、そんな場所で生活している俺は現在十七歳の高校一年生。今も高校生らしく、学校から家までの距離を自転車で下校中である。

俺の家は郊外にある祖父の所持する武家屋敷である。

時代錯誤な建築様式とだだっ広い敷地を有しているために近隣では何かと有名な屋敷となっている。

まあ、祖父の家に住んでいるとなればそれなりの家庭の事情というものがあるのだが、実のところ俺は正直そこら辺の事をよく覚えていない。

概要だけを軽く説明すると、俺は孤児院の出身であり、だいたい五歳ごろから施設にいたといつたりじこ。

小さい時の事なので、孤児院に入る前の事や両親の顔なども全くといつていいほど記憶にない。

そして、六歳と半年が過ぎたころに今現在の祖父と祖母に引き取られる訳である。

だから、戸籍上は祖父は父親という立場になるわけだが、さすがに六十前半のファンキーじじいを父親といつては無理があるので、祖父という関係に落ち着いている。

実際、じじいも孫のような存在が欲しかつたらしく、俺を引き取つた時からえりく自分の事を”じいちゃん”と言つよつになつたとのこと。

一方、祖母は破天荒な祖父とは対照的にものすごく落ち着いた性格。おおよそ、祖父と同い年ぐらいであるがしわもなく、目力も強いため、昔は相当な美人だつたのだろうと勝手に予測している。

なんでこの二人が結ばれることになつたのか甚だ疑問に思うくらい対照的な老年夫婦である。

とまあ、俺の家族背景はこんな感じである。

自転車は快調にスピードを上げ、郊外の木々を横目に踏み鳴らされたあぜ道を進んでいく。

特に問題なく、数分後には家に到着。

自転車を門の裏側に立て、前かごに入れていたカバンを手に取り、玄関へと歩を進める。

「ただいま

「ああ、稽古じゅう」

玄関の戸を開け、お決まりの挨拶をすると、有無を言わせない迫力のある声がそんな唐突なことを言い出した。

「……………会話のキャッチボールって言葉知ってるか？　じじい」

「じいちゃんは昔から横文字を一切受け付けん脳味噌じゃからなあ」

そう、この白髪にこれまで白い顎鬚を蓄えた仙人みたいな容姿の老人が俺の祖父である。

念のためではあるが、このじじい、痴呆症の類は欠片も見つかっていない健康そのものである。

「…………せめて少し休んでからでいいだろ。昨日も夜遅くまで英語の予習で起きてたんだからね」

「ええ～…………」

「”ええ～”じゃない。ガキかお前は」

そう言つて靴を脱ぎ、玄関でそろえてから長廊下を歩いて自分の部屋に向かう。

部屋に着くとカバンを机の上に放り投げ、ベッドに身を投げる。

そのまま深く息を吐き、学ランのポケットにある携帯を取り出して時間を確認する。

今は夕方の四時ちよつけ。

じじいの稽古はともかく少し休むことにしよう。

最近は忙しかったからか少々寝不足だ。

何年かぶりに毎晩としゃれ込むのも悪くない。

ゆっくっとそのままの体制で田を開じる。

だんだんと暗くなつていく部屋を見ながら、どことなく言ことつのない不安が胸に渦巻く。

田が覚めたら、この景色が見えなくなつてしまふので。

所詮、俺の勝手な空想だ。

ただでさえ刺激の少ない

日常。

少しごらごら非日常を夢見たつて、羈は切たつやしない。

自分でやつ踏ん切りをつけると、自然と瞼が重くなつていく。

俺はそのままゆっくりと意識を手放していく。

それが俺の人生を変える理不尽の始まりだとも知らずに。

始まり（後書き）

いかがでしたか？

少し終わり方が強引だった気がします。はい。

えと、感想やご意見待っています。辛口、甘口、ご質問など何でもウエルカムです。

まあ、さすがにこれだけじや意見の出しどうもない気がしますが。

恐怖（前書き）

何時になつたら、前書きいた所までたどり着けるのだろう。

取り敢えず、第一話です。

恐怖

何年ぶりかの毎晩から田代覚めると既に外はざつぱりと口が暮れていった。学ランのままで眠っていたせいか妙に息苦しい。

「…………ち、マジかよ」

身体をお越し、部屋の勝手口の上に備え付けられあ時計を見て思わずやけに毒づいた。

時計の針はどちらも垂直に真上に伸びておひ、自分が知らぬ間に日を跨いでいた事を知らしめる。

何故こんなにも寝てしまったのかなんて原因が分かるはずもなく、ただ時間を無駄遣いしてしまったところといった罪悪感に襲われる。

「宿題やつてねえし、飯も食つてねえ。おまけにじじいの稽古サボつたなんて…………後で向を言われるやう」

ぼやくも過ぎてしまった事はしょうがない。取り敢えず何か飲み物でもと呑く。

「 ん？」

そうして部屋を出ようとしたその時、何か言い様のない違和感が俺を襲う。

何故かは分からぬが、この部屋を出たら最後、無事にここに舞い戻つてくる事ができないような

「 アホらし」

何とも馬鹿な話だ。いくら非日常が欲しいからって、根拠もない感覚を自分でつち上げるなんて

背中越しに引き戸を閉める。その音が嫌に耳に残り、訳もなく苛立つた。

いや、苛立ちの原因は分かつてゐる。俺は非日常を求めてゐる。ただ、

この世界での常識の中で生きてきた俺が自身のそんな思いを認めたくないだけだ。

ありもしないものを求め続けるなんて、言葉に出せば聞こえはいいが、常識的に考えればただのイタイ奴だらう。

非日常を求める自分と、日常を求める自分。

その一つが俺の中でぶつかり合って、すつきりしないだけだ。

厄介なのはここまで自分で整理が出来ていても、この苟立ちが消えないって事。

「つとに 人間つて不便だよな」

独白はむなしく響き、俺は板張りの廊下を歩いていく。

台所にある冷蔵庫から麦茶の入っている容器を取りだし、それをそのままうつぱ飲みする。

季節は夏上旬。冷たい麦茶が一番合ひ季節のはずだが

「今日は冷えるな」

今夜は何時もとは違い、学園のままでも寒気を覚えるほどの妙な空氣のよつだ。

直ぐに麦茶を冷蔵庫にしまい、代わりに冷蔵庫に入れてある魚肉ソーセージを一本無造作に取りだしてビールをはぎ始める。

魚肉ソーセージを

頬張りながら居間を後にしようとすると、ふと廊下から生温い風が俺の頬を吹き付ける。

その事にふと違和感を覚え、何気なくエアコンのリモコンを確認する。

変化はなし。

電源は入っていないし、消し忘れでもなかつた。

「 気のせい か」

不気味な雰囲気に何時しか俺の身体は小刻みに震えていた。そんな

自分の身体に驚きつつも、意味もなく震える身体を押さえつけよう。

「…………なんだ？ これ…………」

しかし、俺の身体の震えは止まらない。まるで俺が気づかない内に何かの恐怖に囚われたようにブルブルと震え続ける。

…………おかしい。何だって唐突にこんな事になつている。

包まれる闇の中で俺は思考する。ついに俺はありもしないものを、そこにあると言つてしまつよつな馬鹿になつてしまつたのか…………

違つ。俺は正常だ。自分の事は良く知つてゐる。例えそれが自分にとつて不都合な事でも田舎者、認めようとしたことはあるが、ちゃんとそれも自分のだと理解はしてゐるのだ。

俺は何処までも正常である。

なら、この震えは何だ？

身体の隅々が拒絶を訴え震え出す。意味がわからない。

震える足を無理やり一步前へ。とにかくまずは行動だ。この寒氣の

正体を確かめる。

そうして前に出した右足の次に左足を運んだ瞬間、ベチャリといふ嫌な音が聞こえた。

目が暗闇に慣れ、少しづつ周りがはつきりと見え始める。そんな中で音は不規則にベチャリ・・・・・ベチャリと俺の耳を震わせた。

間違いない。俺は恐れている。この冷えきつた空氣に怯え、得体の知れないこの音に心底恐怖を抱いている。

手足は震え続け、喉が渴きを癒したいともがく。

はつきりしてきた視界には、純粹な黒が映っていた。それは暗闇に慣れた視界の中ではさえ、純然たる黒のままその小降りの身体を震わせ、四つん這いになっている足らしきものを意味もなくその場で踏み鳴らしていた。

ベチャリ・・・・・ベチャリ・・・・

その不快な音と、正体の分からぬ黒い塊がより一層俺の恐怖をかぎみだす。

怖い、逃げたい、叫びたい。

そんな感情が渦巻くうちに俺の足は少しづつ後ろに下がり始めた。ゆっくりと目の前の黒い塊に気づかれないように音を立てないように。自分にそう言い聞かせながら、一步一歩後退していく。

ただ、あの塊から距離を取りたくて、離れたくて。それだけの感情で俺は歩を進める。

ガシャン。

「…………」

しかし、ここは家の。延々と歩き続けられるような広い場所ではない訳で。

「…………何だつてんだよ。お前は

後ろにキッチンがあるのも知らず、背がシンクの壁に当たり、乗っていたボールを落としてしまった。

「…………」

あの生々しい音が止む。不規則に上下していた動作が一瞬だけ止まつた。

部屋にはボールが縁を下にして回っているガランガランと言つ音しか聞こえない。

塊が頭らしき部分をゆっくりと回転をせる。

ガランガランガランガラン。

心臓が痛いぐらいに早くなる。畜生、畜生。

ガランガランガラン。

足がすくむ。異様に冷たい空気を吸い込むたびに肺が針で刺された
ように痛む。

眼球はとっくに乾いているのに瞬きが出来ない。苦しくて苦しくて
首をかきむしりたくなる。

ガランガラン。

ガランガラ · · · ·

そうか、これなんだ。俺は妙に納得してしまった。この状況がどん
な物か。これから俺はどうなるのか。

ガラ

イヤだ。そうなつてしまつのはイヤだ。俺は咄嗟に台所の引き出しを見向きもせずに漁り、そここしまつてある包丁を取り出した。

ろくに確認せず、包丁やらナイフが入った引き出しを引っ搔きまわしたもので手のひらからは血が流れている。

そんな手のひらをまじまじと見つめた後に、ゆっくりと顔を前に向けた。

「

そこには血よりも遙かに濃い一一つの赤い丸が俺を見据えていた。

身体が震え続ける。動転して息を吸うこと忘れ。

根拠はない。しかし、確信する。

これが”死”だ。

そう思い至つたのと、黒い塊が動くのは同時だった。奴は予備動作もなく、ただ安直に飛びかかってくる。

「ちくつ……しょお……」

俺がそんな唐突な奴の行動に反応できる訳がなく、包丁という武器を持つている事も忘れ、両手を田の前で交差させ、田をかたく閉じた。

ガシャーンといつ盛大な音を立て奴が台所に突っ込む。飛びかかられた俺は全身を叩きつけられ、呆氣なく意識を手離す。…………はずだった。

「はつ、はつ、はあつ…………!？」

荒い呼吸をしながら、俺が恐る恐る田を開けると俺は台所の壁にもたれかかるようにして座っていた。

上を見上げると、流し台に全身を派手に叩きつけた奴が動きづらそうに蠢いている。

…………どうやら俺は逃げ腰のまま無意識にへたり込んでいたらしい。それが項をそうして、奴が俺の頭上を飛び越えていく形で

難を逃れたようだ。

ついてる。俺はついてる。とんでもないラッキーだ。今はどんな高額の宝くじが当たった時よりも運がいいに違いない。

しかし、ただそれだけだ。現に奴は未だに俺の真上でもがいでいるし、危険な状況が続いているのは間違いようのないことだ。

けれど、俺はまだ生きている。生きてここにいる。その事実だけで俺は救われた気分になった。生きていれば抗える。恐ろしいほど感じられるこの”死”の中でも自らを生かす希望が見えてくる。

気分が落ち着いてくる。たった一度の幸運が俺を先程より遙かに冷静にさせてくれた。本当にありがたい。

俺は生きたい。こんな訛の分からぬ生物なのかすらもはつきりしない奴に人生を奪われてたまるか。

こんなに唐突に納得できないまま死んでなんてやるものか。

言いたい事は山ほどある。この激情は何を言つてももの足りないぐら이다。

ただこれだけは言わせてもらひつ。

「俺は 死ない!—」

その言葉を皮切りに俺は弾けるよつと駆け出した。

後ろで蠢く奴に田をくれる事もなく、ただ居間の開け放たれた扉から長い廊下へと飛び出す。

田指すはこの廊下を駆け抜けた先にある縁側。そこから中庭に出て、そのまま塀に向かつて庭の中を突っ切れば家の門はすぐそこだ。

その後はまたその時に考えればいい。今はとにかくこの屋敷から抜け出す事を考える。

自分にそう言い聞かせ、俺はひたすらに足を動かす。

縁側まで全力疾走し、裸足のまま中庭に飛び降り、庭の畠や生け垣を飛び越え、狂ったかのように門から屋敷を飛び出した。

「はつ、はつ、はつ……！」

門を飛び出して気が抜ける。膝に手をつき、肩をこれでもかと上うわせる。

視線を屋敷に向ける。奴の姿はない。あの不気味な冷たい空気も感じられない。あの耳に障る生々しい音も聞こえてこない。

「追つて来ない のか

再び言うが奴の姿はどこにもない。俺には奴がどういう性質を持つていて、どういった目的でこの屋敷に入り込んだかなんて分かるはずがないが、しかし、奴は少なくとも俺の事を追いかけては来ていないようだ。

理由はないが、そう思えてならないのだ。奴は俺を追つては来ない。そう俺だけは

ふと思考が停止する。

俺は今何を考えた？ 奴は俺を追つてはこない。

得体のしれない化け物であるがその目的は謎のまま。

しかし、俺を見るなり当然のようになにかかってきた。そう、俺
人間を見てだ。

そして、目の前にいた人間はこうして逃がしてしまったが、あの家
には人間は俺だけではない。

「 つ！ くそったれが！！」

そう俺という目標を失った奴が次に狙うのは、この世界でたつた一
人だけ俺の家族。

気づけば俺は無我夢中で走りだしていた。

台所からすつと握りしめて離さなかつた包丁を、固く握り直し、玄関の引き戸を乱暴に開け、靴も脱がずに廊下を疾走する。

ちくしょうが、ふぞけるな！

心中で叫びながら、角を曲がりまた走り出す。

あの一人は俺の恩人だ。

小さい頃右も左も分からず、ただ施設で塞ぎ混むように過ごしていた俺を迎えてくれた。

孤独感に苛まれ続けた、あの出口のない闇の中から俺を見つけ出してくれた。

血の繋がりもましてや何の縁もないガキだった俺を養ってくれた。

嬉しかつた。

自分が初めて認められた気がして、とても嬉しくて、感謝してもしきれなかつたのだ。

一人の寝室はもう目の前に迫る。

必死に動かしていた足を、これでもかとそらうがむしゃらに動かす。

失いたくない。まだ、何も返していい。

だから、俺は――――――

刺し違えてでもあの化け物を殺す。

そう、決心して俺は一人の寝室の扉に手をかけた。

「ジジニー、やがれやがれ……」

勢いよく扉を開け、叫ぶ。

だが、室内の光景を見て俺は言葉を失つた。

畳の上に敷かれていた一つの布団。そこに一人はちゃんと横たわつ

頭が真っ白になる。

全身から力が抜け、眼球が大きく開かれた瞼の中で痙攣する。

あれほど強く握っていた包丁が手のひらからこぼれ落ち、床に刺さるのと同時に膝から崩れ落ちる。

そんな。「うそだ。ウソだと誰か言つてくれ。これは夢だと。本当の俺は今もまだあの脳裏の続縁で眠つていて、これはその眠りの中での夢なのだと。

けれど、そんな答えは当然返つてこない。

また、これが夢だと証明してくれるのも何もない。

……ベチャリ。

またあの音が聞こえる。

その音に絶望と虚しさに満たされていた心に憎しみが溢れだす。

それはまるで炎のように俺の心臓を焦がし、身体を駆り立てる。

ふざけるな。

お前がいなければ。

音のする天井を睨み付ける。そこにはやはり奴がいた。

奴は天井に張り付きながら、その赤い眼まなこを俺に向けている。

ふざけるな。

勝ち誇ったように見下しやがって。

正直なところ、奴が何故この家に来て、何故こんなことをしているのか。そもそも、奴は一体何なのか。分からぬことばばかりではある。

けれど、そんなことは今は関係ない。

憎くて憎くてたまらない。奴は俺から奪つたんだ。光を。俺の唯一無二の家族を。

だから、俺はお前を許さない。お前は此処で死ぬべきだ。

例外はない。お前が散らせた命、自らの命で償え。

手伝つてやる。俺がお前を――

「殺す」

それが皮ぎりとなり、俺と奴が同時に互いに飛び掛かる。

拾つた包丁を前に突き出し、ただ真つ直ぐに奴に突っ込んだ。

奴は身の危険を感じたのか、その橈円の体型を変化させ、長い蔓のよつな黒い触手を一本、前足のように生やすとその触手で床を押すよつこして俺を飛び越えていく。

「つー まだまだああああつー」

すぐさま振り返り、迫つてくる触手をがむしゃらに包丁で切り払う。もう無茶苦茶だ。格好も何もありやしない。

けれど――

「そうじやなきや、素人が殺れる訳ねえだろつが！」

そうして、無茶苦茶な体勢のまま奴に飛び掛かった。覆い被せるように奴を押さえ、激情に任せてその包丁を降り下ろした――

「…………か…………つ」

つもりだった。

しかし、包丁は降り下ろされず、俺は胸の辺りを強く突かれた感覚にたまらず息を漏らす。

同時に激しい痛みが突かれた場所を起点に全身に広がり、暖かい何かが俺の腹に滴り落ちてくる。

あれほど暑く火照っていた身体が嘘のように冷え始め、あれほど強く握りしめていた包丁が簡単に手からこぼれ落ちた。

何が起こったのか。意味が分からぬまま視線を落とす。そこには奴の触手。その黒い蔓が俺の左胸を貫いていた。

自分の身体のことは自分がよく知っている。とは、よく言ったもので自身の今の状態を見て、直感に近いものが俺の頭をよぎる。

俺はここで死ぬ。

それを悟った瞬間、俺の身体は簡単に崩れ落ちた。操り人形が糸を切られたように俺はだらしなくその身を横たえる。

薄れ行く意識の中、朧気に映る視界の端に奴がいた。

奴は横たわった俺の身体を数秒凝視すると、おもむろに触手を俺の

左胸に空いた穴に押し当てる。

もう、視界は真っ暗。意識も無くなる寸前。よく分からぬ言葉が俺の頭に直接入ってきた。

――ミシケタ。

こつして俺は死んだ。何も出来ず、何も返せず、多くの未練を残しながらこの生涯に幕を閉じたのである。

恐怖（後書き）

感想お待ちしています。

一度田の終幕（前書き）

さて、今回ようやく東方キャラの登場です。

なんだか、キャラ崩壊がしていなーか果てしなく心配でござります。

それでござります。

一度目の終幕

妖怪　　八雲紫は暇を持て余していた。人間の常識とは違い、
彼女は文字通り人を逸脱した存在　　人外である。

もちろん、その寿命は人間と比べれば月とすっぽん。蟻と象ほどの差がある訳であるが、長寿というものは得てして退屈と付き合いつくものである。

「…………暇潰しここから来てみたのはいいけれど…………やばまつじひめあつちと違つて面白みがないわね」

彼女は退屈そうにため息をつくと、無限に広がる夜空を当たり前のように滑空する。この闇夜では到底意味を成さないであつて日傘を優雅にさしたまま帳の中を宛もなくさまよう。

「……退屈だわ。退屈で死んでしまいます」

そつとう彼女の顔は軽口を叩いた割には沈んだ面持ちであった。

そんな表情を浮かべるのは、今の言葉があながち間違いでもないからである。

彼女のような長命な存在にとつては正に退屈は死を招く原因なのだ。

長寿。聞こえはいいが、実際は退屈との戦いである。

長く生きれば生きるほど、精神は様々な事に対応し、肥えていく。

そうなつてしまつた感覚は、ごく一般的の娯楽や快樂では満たされない。

ましてや、彼女は人外。元来、人から逸脱した彼女が並大抵の事で満足する訳がない。それに長く生きた経験も合わせれば、いつたい何が彼女を満足させる事が出来るのだろうか？

故に退屈。退屈なら生きている意味もない。そんな結論に簡単に至つてしまつ可能性が大いにあるからこそ、彼女は言葉の調子に反して沈んだ表情を浮かべていたのである。

(何をいまさら……)

彼女は心の中でそつまくと、自嘲の笑みを浮かべる。

考へても仕方がないのである。それは今までに何度も考へ、感じてきた事なのだから。

彼女自身も氣分を切り替えようと、その場に停止し、背伸びをした。

その瞬間である。彼女の纏う雰囲気が急激に張りつめる。

鋭い視線は彼女の真下。今の時代には少々時代錯誤な大きな武家屋敷に注がれていた。

彼女は「ちりの世界ではほぼ感じる事のない気配を感じ取り、何とか納得のいかないような表情を浮かべる。

「……殺氣？ それにこの不安を助長させるおぞましい気配……」

そう、彼女が感じたのは殺氣。それもかなり濃密な、である。

感じた時間こそほんの数秒だったが、その殺氣の後を継ぐように今度は形容し難いおぞましい空気が場に漂っていた。

その空気に彼女は知らず知らずのうちに笑みを浮かべていた。

「前言撤回。今宵はとても楽しめそうだわ。こうこう事がたまにあらかるりの世界は止められないのよ」

まあ、たまにと言つても百年に一回程度だけ、と紫は先

とほつて代わつとも樂しそうな顔でゆっくり高度を下げていく。

「さあ、藪からは鬼が出るか蛇がでるか。何にせよ精々この大妖怪を楽しませてくれるこことを期待していますわ」

そう、いないはずの第三者に語りかける紫。その声は、何処までも妖艶で、何処までも威圧的で、何処までも嬉々とした響きを持つて闇夜に溶けていった。

「…………」これは

屋敷に侵入した紫は屋敷中を隈無く探索し、ある一室にたどり着いた。

そこには老いた夫婦らしき女と男、そして学生服を着た少年が血を流しながら倒れていた。

「…………ふむ」

その光景にこれと言った反応を紫は示すことなく、老夫婦に近寄り、右手の手袋を外すとその手を一人の首に順に押し当てる。

「脈はあるわね。…………惨状に比べて傷もそれほど深くない。これをやつた子はよっぽど散らかす事が得意みたいね」

ふふつ、と艶やかに笑うと彼女は指を一振りする。すると、老夫婦の身体にあつた幾重もの切り傷が自らの意思を持つかのように閉じていった。

「…………んっ、……」

「あら、気がついた?」

老人が傷が塞がると同時に眩しげに目を開けるのを見て、紫は満足気に微笑んだ。

「…………妖怪のお嬢さんがわしに何のよひじゃ？」

「あら？ 私がどんな存在か分かるの？」

そんな老人の言葉に紫は初めて驚いたような顔をしてみせる。

「昔、お前さんの同族を相手に仕事しどつたからな。特有の匂いが
ブンブンするわい」

老人はそんな紫の言葉に事もなげにそう返した。

「さうじやー ばあさんは

「心配ないわ。命に別条はないし、今は眠ってる」

紫はそうだけ言つと、老人に田に向けることなく歩を進める。その先には一人の少年の変わり果てた姿。

「…………なんじや、これは」

その姿に老人は言葉を失つた。その変わり果てた姿を見て、信じられないでも言つように少年の死体から田を離すことなく身体を硬直させていた。

そんな老人を尻目に紫はその死体の側に立ち、何かを見定めるように死体の端から端まで丁寧に観察し始める。

「何…………これは」

そして、紫はそう一言呴き端正な顔を苦々しく歪めた。その顔には疑念と悔しさ。その一つがありありと示されている。紫が感じた殺氣とおぞましい空氣。その出所が特定できたのである。

その出所はこの死体であった。

殺氣はもちろん一瞬の出来事であつたため、今はそれじたいは残つてはいない。しかし、殺氣には残滓が残る。

料理をした後の残り香のよつこ、その痕跡は感じ取るもののがその感覚を鋭敏に感じ取れる事が可能ならば、強くその気配が残つているものなのである。

紫はまさに今その殺氣の残滓を感じ取つていた。それだけならば、良かつたのであるが、今回は少し勝手が違つたのだ。

彼女が死体から感じ取つたのはそれだけではなかつたのである。

この場に来るきっかけとなつた、形容し難いおぞましい空氣。それが少年の死体を起点としていたことに紫は焦りにも似た感覚を感じていた。

殺氣と同様この空氣の残滓が感じ取れていたのなら問題はなかつた。しかし、この不可思議な空氣は今現在もこの空間を取り巻き続けてゐる。

その起点が既に死亡してゐることである。

眼前のその光景を見て、紫は思案顔で目をつむり、数秒つづみいた後、男性の方に顔を向ける。

「 息子は 」

そう、絶望を張り付けたような顔で声にもならない声を上げる老人。それを見て紫は努めて冷静に言い放つ。

「死んでるわ。完全にね」

ただ、と紫は続ける。

「心臓に何か得体の知れないモノが寄生している。これが今良くな
い気を発しているわ。見て『らんなさい』

紫の言葉に老人は息子の死体に近寄り、紫が指差した左の胸部を覗
き込んだ。

「これは……！」

そこで老人が見たのはぽつかりと空いた風穴が小さく胎動している
光景だった。

「ここの死体に着いたモノはおそらく自分自身を自分が貰ったこの子の心臓 の代わりにしているの。そこから、彼の身体の破損した部位を修復するように力を使っている。このおぞましい空気はその力の余波と言つた所かしら」

「だったら、息子はここまま行けば助かるのでは……」

老人の言葉に首を横に振る紫。それと同時に何処からともなく扇子を取りだし、少年の死体を指す。

「言つたでしよう。彼は完全に死んでいる。身体が戻つても、一度止まつた命は戻らないわ。それにこのナーナはもつと厄介なモノよ」と紫は死体を指していた扇子を、おもむろに何もない空中で滑らせた。

すると、その軌跡をなぞるように空間に不可思議な裂け目のようなものが現れた。

その裂け目に寄りかかるように紫は腰を降ろし、話を続けた。

「このナニカは結論から言えば、この子の身体を欲しているの。このモノはこの子の身体を使って何かをするつもりよ。だからこそ、この身体を万全に整えている状態。もし、この身体が万全の状態になつた時は……この子は再び動き出すわ」

「しかし、心臓は止まつているのじゃね？ なら動くことなど……」

「私が言つた完全に死んでいるってのはただ単に心臓が動き出さないって意味じゃないわ。放つておけば、このナニカはこの子の心臓も万全な状態にして生物学上は生き返らせてくれるでしょう」

けれど、と紫は言葉を繋げる。

「それは以前のこの子とは全く違う存在。このナニカがとつて変わつた、姿形が同じだけのバケモノよ。この子は完全に死んだわ。この子の中身が完全にね」

紫がそこまで言つと、老人はもう何も言い返はしなかつた。ただ、突き付けられた事実に悔し涙を流し、顔を伏せていた。

無理もない、と紫は老人を憐れんだ。自分の息子がよく分からぬ理由で命を落としたと言われたのだ、理解はしても納得は出来ないに違いない。

「本当に何も出来ないのか、本当にこの子は……」そのまま死んでいくのか？」

老人の問いかけに紫は答えない。空中に浮かぶ、裂け目に腰をかけたまま老人を見下ろしていた。

「妖怪のお嬢さん。わしはこの子を貰った時、この子は幸せにしてやらなければ嘘だと思った。そう思つて、今まで育ててきたつもりなんじや」

「貰つた？ なら……」

「ああ、血は繋がつておらん」

自嘲気味に老人は呟く。

「血も繋がっていない赤の他人が見ず知らずの子供を幸せにしてやりたいなど偽善なのかもしれん。じゃが、お嬢さん。お主はこの子が孤児院にいた頃、どんな目をしておったか知つてあるか？」

老人は言葉を紡ぎながら涙を流す。一度と戻らない息子を思いつつ、守りきれなかつた自分を悔やみつつ。

「年端にもいかん子供が……殺人者と同じ目をしておつたのだ。大人がすくんで動けなくなるぐらいの冷たい目を。想像できるか？ たつた六つか五つの子供がそんな目をしなければならなかつた状況が！！」

老人の叫びにも似た告白に紫は息を飲んだ。紫は何度も言つが、妖怪である。

人間とは考え方も違うし、常識も違う。生きるために他の生物を殺すことも、それが自分達と似ている人間であろうと迷うことはなかつた。

けれど、その状況が殺す事に多少は慣れている彼女ですら想像出来なかつたのだ。それはどんな地獄だったのか、どんな闇だったのか。

齡よい二百年以上の彼女ですら戦慄を覚えるものであった。

「同情？ その何が悪い！ 人間が他人を幸せにしたいと思って何が悪い！ だから、わしは決めたんじや。あの子を絶対に幸せにすると……なのに」

老人は泣き崩れた。それが何の意味も持たないと知りながら、それでも泣かずにはいられない。

「……頼む、お嬢さん。お主は他の妖怪とは違い、特殊な力があるのだろう？ それも強大な……例え方法がないにしてもわしはお主にすがるしか方法がないのじや。わしはお主の同族を殺してきた敵かもしれん。しかし、それでも……」

老人はそう言って、紫の前で膝を着いた。紫とてその意味が分からぬ訳ではない。何かを察したのか、少し嬉しそうに微笑んで口を開いた。

方法なら一つあるわよ。と。

その言葉に老人は涙でぐしゃぐしゃになつた顔を上げる。そこには驚きと希望の色。

紫はそんな彼を見て、兼ねてからの考えを話しだした。

「この子に巣くつているナニカは順調にこの子の身体を修復させていく。そして、最後には心臓も修復されるでしょう。その修復が完了した瞬間に、この子とナニカを切り離すの。そうすれば、彼は身体は元通り、意識も以前の彼と同じままよ」

ただし、条件がある。と、紫は付け足す。

「彼はこの世界とは別の世界に連れていく。こんな事になつた以上、またこの子が何時同じ田に会うか分からない。それに、彼と寄生しているモノを切り離すと言つてもそれが百パーセント成功する保証もない。確率で言えば五分と五分だし、仮に成功しても何らかの後遺症が残る可能性がある。それがなんであれこの雰囲気からしてこちらの世界では到底対応しきれないものになるでしょうしね」

老人は紫の条件に迷うことなく頷いた。これが愛しい息子との今生の別れだと理解しながら、それでも躊躇つことをしなかつた。

それはひとえにわが子の人生を一番に考えたから。死んでしまつては意味がない。もし、生きる事が可能な選択肢があるなら、それを選ぶと。例え、その結果私達が苦しむことになつても、息子の命に比べれば安いものだと老人ははつきりと言い切つた。

「あさんも必ずそれを分かつてくれると、未だ日を覚まさない老婆に微笑みながらそう呟いた。

その姿を見て、紫はもう何も言わなかつた。つられるよつて微笑みを浮かべ、ゆつくりと扇子を横に滑らせた。

その動作に連動して少年のを包むよつて地面が割れ、ゆつくりとその身体が沈んでいく。

生きる。バカ息子。お前と出会えてよかつた。

少年の身体が完全に裂け目に沈み込み、跡形もなく消えた後、紫は老人に向かってこう言つた。

「私は妖怪。いつも彼の味方であることはないかもしません。けれど、約束しましょう。あなた達は今まで私が見てきた中で最高の親だつたと彼に伝えることを」「

それが私のできる礼儀です。

と、言い残し彼女も姿を消した。

朝日が昇る。まるで新たな門出を祝つよつこ。

少年の生涯は一度幕を閉じた。しかし、数奇な運命は舞台を変えて
彼を再び呼び戻す。

開演。ここから少年の一度目の舞台が始まりを告げる。

一度目の終幕（後書き）

いかがでしたか？

今回は完璧なるジジイ、ババ（「ソゲフンゲフン」、無双でしたね。

さて、次回からようやく幻想入りでございます。早く昔の場面まで追いつきたい（涙）

感想、ご意見お待ちしています。これらは作者の原動力にもなりますのでお願いします^ ^

後、最後になりましたが、お気に入り登録してくださった方々。本当にありがとうございます。まだまだ、非才の身、駄文万歳な訳でありますがどうか長い目でじ声援頂けたらと思います。

夢（前書き）

めつひや遅くなつました（汗）

取り敢えずどうぞ>>

夢

世界は理不尽である。

言わざもがな、この俺。かんべくおの神部黒央の自論である。

それを他人に押し付ける気もないし、心に留めておいたところで何かがいい方向に傾く訳でもない。

そう理解しているのに、ここでの言葉を取り上げさせてもらひたのにはそれなりの理由がある。

まず、俺はあの時死んでしまったはずだ。

家に現れた正体不明の黒い塊と、戦いと呼べるのかも分からぬ取組み合いを繰り広げ、心臓を一突きにされた。

それで神部黒央の生涯は幕を閉じたはずなのだ。

にも関わらず、……

「何で生きてんだよ、俺」

俺の心臓は穏やかに動き続けていた。何事もなかつたかのように、至つて平静に鼓動していた。

「ふう……」

その事実に俺はまたまうず堵の息を吐く。

原因なんて分からぬ、考えうる可能性の中には後で落胆しそうなものもある。

けれど、そんなことを度外視して単に自分に命があったことに喜んだ。

「……そつか、俺……生きてたんだ」

よかつた、と仰向けになりながら呟く。

俺の呟きは誰に聞こえるでもなく、この一画面に広がる青空に消えていった。

さう……青空である。

俺の目の前に広がるのは曇りのない快晴の空。

しかし、俺はつい先ほどまでは屋内にいたはずなのだ。それも勝手知った自分の家の中である。

だったら、この状況はどう考えたっておかしいの一言に及ばぬ。

家中で意識を失い（正確には死に）、目を覚ませば屋外にいるなど何処のB級映画だと嘆きたくなる。

しかし、まあ事実は事実だ。戸惑いはあるが、受け入れる他ないだら。

そして、その事実を受け入れた上で言わせてもらひおつ。

「…………何処だ、ここは？」

世界は本当に理不尽である。

さて、少しばかり落ち着いてきた所で状況を整理してみよう。

俺は先ほども確認したように、一度命を落としたはずだ。

しかし、現時点で俺はこのよつて呼吸をし、意識も視界もはつきりしている。

この事ももちろん驚きだ。

だが、まああり得ない話ではない。

現代の医療技術を駆使すれば助かる確率がゼロというわけではないし、考えられない事はない。

まあ、可能性だけを考えるとあの時命を落としていた事の方が考えられるのだが。

それよりも不可思議なのは

「 ほんと、何処なんだよ 」

おおよそ現代の日本でも見られないよつた、目の前に広がる幻風景だった。

少し重たく感じる身体を起こして、吹き抜ける風を身体全体で感じる。

現代の開発が進んだ日本では感じられないよつた風の香りが鼻を突きぬけ、心地よい暖かさで俺の頬を撫でていく。

空は雲ひとつなく、澄み切つた青空に田も眩むほどの光を放つ太陽が、その光で眼下に広がる草原を照らし出していた。

遠くに田をやると、今立っているこの場所は小高い丘にあるのがわかつた。

連なる山々に囲まれ、農村のよつたな建物が幾つも立ち並んだ場所があり、ほかにも暗い雰囲気を放つ鬱蒼とした森や異彩を放つ真つ赤な洋館、そのそばで輝く湖などが俺の田に入ってきた。

「…………すげ」

その幻想的な光景に俺は思わず声を漏らした。

今までに写真や映像、または直接見てきた地球上のどんな景色も今目の前に広がることの景色には遠く及ばない。

感じたことのない感動が俺の中を満たしていく。

しかし、それと同時に俺の心には先ほどから拭い切れなかつた疑念がより濃くなつて噴き出してきた。

おおとおここの世とは思えないほどこの光景。

なら、『日本』に、『世』であるのだからか。

もし、この場がこの世でなことしたら……田の前に立がる幻風景にも納得がいく。

見たこともない景色、そりやそつだらう。『』が“あの世”だとするなりそんなものを今まで見てこなかつたのが当たり前なのだから。

だが……と、何氣なく視線を下に落とし、左手を自分の左胸に押し当てる。

「……動いてるよなあ」

そう、ここがあの世で俺が死んでいるのならまだそうやつて結論づけられたのだが……俺の心臓は現に動いているのだ。

それは即ちまだ死んでるわけではなく、生きたままのこの世（仮）に来てしまつたことになる。

……訳分からん。

たとえそうだとしても、どうせここに来たの場に俺は来たのか。

一度死んで目覚めたむすび一つの俺の人格が勝手にやつたのか？

それとも、あの場に摩訶不思議な第三者がやってきて俺を時空の間にでも落としたのか？

それとも

「……やめた」

やつて、俺は諦めるようこそその事について考えるのをやめた。

今、こんな事を考えていても仕方がない。分からぬものは分からぬし、分かつた所でどうなる訳でもない。

「まあ、取り敢えずはあの集落まで行ってみるか。此処がどこなんか聞く必要があるし……聞く人がいるかどうかも調べないとな」

そう呟いて、ゆっくりと歩を進めていく。

そうだ、俺が此処にこいつをひいて戻ることのはどう考へてもおかしい。

おかしこと語つなら昨日（？）の晩の出来事から。

体感時間にしておおよそ半日。

この短い中でよく分からぬ事ばかりが起つてゐる。

こんな小説や漫画でしか有り得ないような出来事が、今實際この身に起きてゐる。

ならば、それそろ常識なんてものも通用するかどうかも怪しくなつてきた。

遠くに見えるあの民家に人がいるはず、なんて語つ常識も通じないかも知れない。

願うならばそれが俺の身勝手な妄想であつてほしいのだが……

「……ほんと訳わからんねえな」

半ば自棄になつてそつ吐き捨て、俺は集落がある方角へ歩を進めていった。

足元には人が歩く道とは思えない、獸道が続いている。

歩を進めるにつれて周りにも徐々に雄々しい木々が見え始め、景色に圧迫感を感じ始めた。

その圧迫感はだんだんと形を成し始め、ついには今のように鬱蒼とした森が俺の周りを囲っていた。

そんな中を歩くこと約一時間。

森が途切れる気配は一向になく、視界には延々と続く緑、緑、緑。

「……はあ

そりや、ため息の一つも吐きたくなるもんである。

街中を一時間歩くだけでも割と辛いのに、ほぼ変わらない景色の中を延々一時間歩くのは、さすがにといつかかなり厳しい。

まるで同じところを何度も通つてこむような錯覚に陥つてくれる。

人間、刺激の一つや二つなければ生きていることすら億劫になる存在だ。

こんな所、一週間いたら確実に死にたくなる。

そんなことを考えながらも、足を止めたところで何かが起こるわけでもない、俺は足を止めることなく歩き続ける。

「…………俺、何やってんだろ？ 何だからん間に訳分からん黒いのに襲われて、一思いに心臓一突きされて殺されたと思ったら、実は死んでなくて、目が覚めたら知らない場所で…………」

嘆くも状況は変わらない。ただ、あの丘から見えた集落を目指して歩くだけ。

まあ、それが直接の解決方法になるわけではないのだけれど。

せめて、話ができる人がもう一人この場にいれば大分心持ちも違うのだろうが。

「無い物ねだりしたってなあ…………その草むらからいきなり人が飛び出でくる訳でもない…………」「わはーー」「…………し？」

そんな事を呟いた瞬間だつた。

不意に田をやつた草むらから金髪の美少女が飛び出してきた。

金髪。美少女。

• • • • • • • • • • • • • • • • • •

「わは——」

「…………夢つて見てみるの、じやないの?」「

「せうだよ。だから、俺は寝てるんだ。今、いつやつて立つてゐる事も、周りに見える森も、そして田の前の金髪美少女もすべて俺の浅はかな妄想なのさ」

「そーなのかー」

「……………」

人とは一田でこんなにも意味の分からぬ出来事に遭遇するものなのだろうか？

純粹に気になつてきた。

「えつと…………取り敢えずお前の名前聞いていいか？」

「ルーミアはルーミアなのだー！」

「オッケー、ルーミアな。じゃあ、ルーミア。俺の夢の産物だと思われる君に質問だ。婉曲的に君を生み出した俺は親みたいなものだから何でも正直に答えるんだぞ」

「親…………？ パパってこと？」

「そうパパだ。返事は」

・・・・何か今更なんだが、俺すごくバカなことしてないか？

「……………」いや、一応はやめだ。」

「もう一つ！」

「ごめん。俺の聞き方が悪かつた」

清々しいほどの答えである。何も間違つてはいない。

「あー……じゃあ、この世界はなんて名前だ?」

「幻想郷だよ！ パパ、そんなことも知らないの？」

「ああ、パパはあんまりお利口でないんだよ」

幻想郷。

聞いたこともない地名である。

「じゃあ、二つ目。この幻想郷に人はいるのか？」

「いぬよ。この道をまひまひとまっすぐ行つたら人里があるから」

元氣一杯に答えるルーミア。

どうやらあの集落にはちゃんと人が住んでいるらしい。

よかつた。これで何とか現状の把握をしつかりできそうだ。

この少女が俺の妄想の產物でなければ、だが。

「ありがとな。じゃあ、俺はそこに行つてみるわ。ルーミアも来るか？」

「うん！ あつ、そうだ！ 私も聞きたい事あるんだけどいい？」

「んつ？　ああ、何だ？」

何気なくそう返すと彼女はこう言つた。

「あなたは食べてもいい人間？」

夢（後書き）

昔のようなダークサイドな文章の書き方が分からなくなつて來てる
作者であります。

取り敢えず卑く話をそれなりのところまで進めたいですね。

正直、今までのところは自分で読んででもストーリーが見えてこない
のであんまし面白くない（泣）

この面白くない部分を後々のストーリー展開に繋げていけたらと思
います。

感想、ご意見はいつでもお待ちしています。読んでくださった方々
ありがとうございます。また、お気に入り登録してくださった方々
にも多大なる感謝をへへ

捕食（前書き）

遅くなりました。
びつや

一瞬、自分が何を言われたのか理解が出来なかつた。いや、たとえ理解したとしてもその言葉が真実なのか虚構なのか、その判別さえつかなかつたに違ひない。

それだけ、この少女が言つには酷く不釣り合いな言葉が俺の耳に入つてきたのである。

しかも、その言葉を発した本人は返事を待つてゐるのか二口二口と屈託のない笑顔でこちらを見ているのだ。これはどうにも俺の聞き間違いだと考えるのが普通だと思つてしまつ。

ふむ、ならばこの場合何と答えるべきなのだろうか？　聞き間違いを素直に認めて、もう一度何を言つたか聞くべきか、それとも教えてその聞き間違いに会話を合わせてみるのか……

まあ、黙りこむのも失礼だ。何かしらの反応をしなくてはならないだろう。

そつ思い立ち、取り敢えず何か答えようと口を開いた時

目の前の彼女が突然消え失せた。

「……えつ？」

あまりにも一瞬で突然の出来事に俺は情けない声を上げ、目を丸くした。

そして、またも直ぐの出来事。俺の耳元をくすぐるよつこ少女ルーニアの声が聞こえてきた。

「…………イエスだね。ありがとパパ！」

その声が先ほどままでと何ら変わりない、無邪氣で純粋な調子だったため、俺は直ぐに気づく事が出来なかった。

自分の右足に大きな穴が空いていた事に。

絶叫。今まで味わった事のない痛みを受け、俺は自分自身聞いたことのない声を出していた。

悲鳴とも、慟哭とも取れぬ只の叫び。足を貫いた切り刻まれたように鋭く、抉られたようにしつこく、殴られたように重い痛みに俺は半ば本能の赴くままに叫んでいた。

痛みがその叫びでなくなる訳でもないのに、俺の頭はそれを理解していくも叫ぶのを止めない。

「イイ」

「あはは、パパ知ってる？　外の世界ではね、沈黙は肯定って言葉があるんだって」

そう言つて倒れる俺に馬乗りの体勢になりながらルーニニアは変わりなく無邪氣で、純粹な声色で俺に語りかける。

そんな彼女と目が合つた。ルーミアは今までと何ら変わらない、とても楽しそうな表情で俺を見ている。この状況が当然だと、この状況に何の疑問も見当たらぬと。どこまでも嬉しそうに 笑う。

そうした瞬間、彼女の異質なこよつけやく氣づいた。

ルーミアはその姿からも勿論考えられるように少女 小さい女の子だと十人中十人がそう考えるだろう。

小さいということは、その身体が成長している最中であり、あまり力もない。

単純な腕力だけなら高校生の俺に概算七～八歳の少女が勝てる訳もない。この状態を振り払おうと思えば、何時でも振り払える。

だが、今それが出来ない。

馬乗りになられ、両腕を地面に押さえつけられている腕を振り払う事が出来ない。

ルーミアの腕はその白く細い腕では到底想像できないほどの力で、俺の腕を押さえつけていた。

万力で締め付けられたように、俺の腕が潰れんばかりの力だった。

だからこそ異質。この状況下でこんな事が起こっている事の意味が

俺には全く理解できない。

「ふふ、じゃあねパパ」

そう言ってルーニアは顔を俺に近付けてくる。 なんだよ、
どうしてそんな事を言いながら俺に近づいてくる？

訳が分からぬ、一から説明しろ。

そつ言つてやりたいのに俺の口から出るのはせせらぎした呻き声だけ。
またルーニアと田が合づ。彼女の眼はどこか生きしゃべり、怪しい光を
帶びていた。

ああ、この少女は狩人だったのだ。俺はその田を見て訳もなくそう
確信した。

彼女は俺を同等と考えていない。彼女にとつて俺は道端にいる虫の
よつ存在なのだ。

よく小さい子供は何の疑問も持つことなく道端にいる虫を潰したり、殺したりする。それは単純に何も分かつていらないだけだと言う反論があるかもしねいが、ならば大人になつてからはどうなのだ。

大人になつてもそういう人間はいる。無論、それが命と分かつている以上むやみに命を奪うような事はしないが、その個体が自身に危害を及ぼす可能性があると知れば、同じ事をするだろう。

蚊や蜂などを潰したりするのが良い例だ。

自分よりも力では劣り、簡単にその命を奪うことができる。その重みを知らずに人は矮小な存在の彼らの命を無意味に刈り取る。

食においてもそうだ。弱肉強食。この理の中で頂点に君臨していると過信しているのが人間だ。

肉を喰らう為に鳥や牛や豚を殺し、魚介の幸を楽しむ為に魚類を獲り、栄養を補填する為に米や野菜を刈り取る。

多くの生き物を蹂躪しているからこそ得られる究極と言つていいほどの優越感。

それを身に受け、その行為に内包された罪を忘れてしまつたからこそその過信。

それがあるからこそ人間は同種の人間以外を殺すことに躊躇いがない。

では、何故人間は虫や魚や牛などを同価値の命として見られないのか。

理由は簡単だ。自分たちと意思の疎通ができないから、ただこれだけの瑣末な理由なのである。

自分たちの”言葉”といつ「ミリミリケーション」が通じないからとうどこまでも身勝手な理由だけでその生物を見下せる生物

それが人間。

捕食者と被捕食者。強者と弱者。支配者と従属者。

世界の真理。絶対の規則。

常にそりやつて過ぐしてきた俺も何ら変わりない。自分がその真理において上位の存在だと確信して已まなかつた。

だが、今日の前の少女は俺を完全に支配している。

だから”獵人”
捕食者なのだと俺は確信したのかも知れない。

彼女はどこまでも純粋に俺を支配し、従属させている。

それが当たり前で、自分の考えを相手も持っているのが普通だと。まるで俺たち人間のようにどこまでも当然に、どこまでも一般的に

この行為に及んだ。

その純粹さが、

どこまでも恐ろしい。

「 いただきます」

ルーニアはそう言って、その可愛らしさ小さい口を開ける。

その言葉で俺を本当の意味で捕食しようとしているのが理解できた。

しかし、何故だ。何故同じ人間である彼女が同種の俺を捕食する。

やはり、これは俺の夢なのか。それとも、彼女は幼いながらに人格が破綻しているのか。それとも 人間ではないのか。

ルーニアの口が迫る。恐怖が身体中を駆け巡った。

死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない。

自宅で一度死んで、助かつたと安堵したにも関わらずまたすぐにこの仕打ち いくら何でも酷いものである。

抗いたい、抜け出したい。この苦痛と恐怖から逃げ出したい。

”殺せ。”

不意に頭にそんな考えが浮かぶ。

何を馬鹿な先の黒い塊のような得体のしれないものならともかく彼女は人間だ。

”殺せ。”

でも、人間を喰おうとする人間なんているのか。そもそも、彼女は人間なんだろうか。

”殺せ。
”

そうだ、別に良いじゃないか。これは正当防衛だ。俺は彼女に喰われかけて、自分の身を守る為に動くのだから。

”殺せ。
”

「 そうだ
・
・
・
・
」

今まで動かなかつた口がすんなり動く。そして、自分が今まで聞いた事もない声でこう言った。

「殺してしまえ」

「靈符”夢想封印”！！」

その凛とした言葉が聞こえたのは、俺が言葉を発したのとほぼ同時だった。

おそらく女のものと思われる澄んだ声が聞こえると、俺の目の前にいたはずのルーニアが虹色の大玉に無防備に吹き飛ばされていった。我に返り、仰向けのまま呼吸を荒げ茫然としていると、その視界に見知らぬ一人の少女が何食わぬ顔で姿を現した。

艶があり、癖もない真っ直ぐな髪。それを赤い大きなリボンで後ろに纏め、そのリボンに合わせるように赤を基調とした和服姿。

こちらを覗きこむその瞳は大きく、意思の強そうな光を放っていた。

彼女は俺の様子を一目見て、どこか怪訝そうな顔をするとそのまま口元を開いてこう言った。

「あんた、大丈夫？」

捕食（後書き）

「」意見、「」感想お待ちしております（^-^）

なんか、小説を書いてるといつぱり落ち着きます。仕事にしていけたら万々歳なんやけどなあ（^-^）

前進（前書き）

めちゃくちゃ更新が遅れました。この調子なら完結までにこゝらか
かるんだろう（泣）

よく小説やドラマで見る描写みたいと思つてみたいと思つ。

いきなりこんな話をされても何が言いたいのかが全くもつて理解できないとは思うが、そこは少し我慢してほし。

省略 読んで字の如く、省いて略する事を指し示すわけだが、これがよく使われるのは例を挙げれば、いつもの学校の帰り道、普段どおりに過ぎて行つた学校生活などである。

まあ、学校という場所に例が偏つてしまつたのは単に俺が高校生だっただけであり、そのあたりはあしからず。

そして、この方法が使われるのは特定の場合においてのみ。

それは語り手もしくはそれに準ずる話を伝える側の者が主に取り上げるべきことないと判断した場合のことである。

さすがに物事を一から全て伝えようとした時には、やつ書つた何の変哲もない、何の面白みもない出来事だつて付隨していくものだ。なんていう表現を逐一語られてはこの世の物語は全て完結することがなくなるに違いない。

まあ、何が言いたいかと言えば、この省略といふ表現は語るまたは説明するところの状況においてはなくてはならない大切なものだとい

「う」とあります

何故そんなことをわざわざ面倒くさい言葉を並べて説明したのかと言えば、実に簡単な事でありたつた今から俺がその表現に頼ろうとしているからである。

さて、といつことで今の俺の状況に至るまでを簡潔に省略して語るとしてよ。ひ。

まず第一に、俺の目の前に現れた少女
はぐれいれいむ
博麗靈夢は俺の味方と言える存在だった。

赤と白の珍妙な巫女服に身を包んだその少女は吹き飛んで行つたルーミアから俺を守るように前に立ち塞がつた。

そして、凜とした声でこいつ一言。

ルーミア、その卑しい口を閉じなさい。

それだけで体勢を立て直しこちらを伺つていたルーミアは見た目相応に不満げな表情で頃垂れた。

それを確認すると、靈夢は話は後だと言わんばかりに俺を女性とは思えない力で抱き上げ、彼女の住む神社 博麗神社まで運んできただのだ。

今は貫かれた足の怪我を応急手当してもらい、包帯まみれの足によ

く分からぬ札のようなものを貼られて居間と思える部屋に座らせられている。ぶつちやけここまで展開が速すぎて何が何だか自分でも分かつていないので

こんな右も左も分からぬ場所で親切にも（と言つてもかなり強引にではあるが）怪我の治療をしてもらい、なおかつ一息つける場所を提供してもらった彼女の好意を無碍にするわけにもいかない。

ならば、俺が取る行動は”素直に従う”この一言に尽きる。

身も蓋もないといふか、何の捻りもないといふか……けれども間違つたことをしていい事だけは確かだと胸を張つて言える選択だらう。

「はー、どうだ

「あ、どうも……」

とまあ、こうして畳頭で偉そうに語つてみた”省略”といふ表現を使つて今現在の状況を説明したところで、先の少女 博麗靈夢がお盆に乗せた三つの湯呑の一つを俺の皿の前に置いた。

彼女は湯呑をもう一人の少女 ルーニアの前に置き、さらに自分の湯呑を手に取ると俺と向かい合いつなにして腰を下ろした。

ちなみにルーニアは俺のすぐ右隣で出された湯呑を興味深げに眺めている。

実際、この足の怪我の原因の大本たる彼女に隣に座られて内心気が
氣でないのだが、とかか何でついてきたんだろうかこいつ。

「それで？ 何だつてあんなところにいたのかしら？ あなただつ
てあの場所が危ないつて知らなかつた訳でもないでしょ？」

「確かに森は危ないんだろうけども……現代の日本で暮ら
している身としてはそういう場所への危機感つてのは割と薄れてる
し……」

「なにそれ？ 何にせよあんたの不注意じゃない」

「はあ……すこません」

自分でも情けないと思つぽい氣の抜けた返事をする。

「とつあえず、あんたは人里に住んでる人間でしょ？ 今から行つ
たら遅くなるから今田はつちに泊まつてきなさいよ。明日の朝一番
に送つていいてあげるから」

「ひと……ぞとへ」

あまつ聞く「のな」その単語に思わず首を捻る。

意味合いとしてはもうひと人が住んでいる里の事なのだろうが……

・・・

俺の歯切れの悪い答えに彼女は訝しげな顔をして、視線を俺の胸元に落とす。

「そういえば、あなた見慣れない格好してるわね？ なにそれ？」

「いや、何つてただの学生服だろ。俺から見ればそっちのほうが十分見慣れない格好だと思うんだけど……」

そういう俺に彼女はいつそう眉をひそめる。

しかし、その表情も束の間。

次の瞬間には憑き物が落ちたように納得気な顔をし、わざとらしく手を叩いて彼女はこいつ言った。

「ああ、あんた外来人か」

「外来人？ 外国人じゃなくて？」

「ええ、外来人。最近多いのよねその手の人間とか……仕事が増えて嫌になるわ」

「はあ……仕事増やしてすいません」

何だか知らないが彼女は一人で納得して、お茶をすすり始める。

「口の表情が変わる人だなとそんなことを考えながら、俺はその様子を黙つて見ていた。

「なあ、そろそろここが何処か教えてもらえないか？　さつきルーミア……さんにも聞いたけどここは幻想郷だつていう地名しか教えてくれなくてさ。ここは何県なんだよ？　というか、まず日本なのかここ？」

そう言った俺に霊夢さん（？）はどこか複雑な表情を浮かべた。

なぜそんな表情をするのか　それを聞くのは簡単である。

ただそれには多大な勇気が必要だった。

それはもちろんほぼ初対面の人の顔色をいちいち詮索していくことを知られる事が恥ずかしいということが原因でもある。

しかし、今回はそれだけではない。

何故、勇気が必要なのか？

それは恐怖

今の自分の不可思議な状況に対する至つて素直な恐怖。

死んだはずの自分。

見たこともない景色。

そして、隣にいる少女の奇行。

元来、いろいろと考えすぎなきらいのある俺の頭の中にはいくつかの結論が浮かんでいた。

その中にはもちろん受け入れがたいものもある。

それが怖いのだ。

その質問をすることと、その頭にある受け入れたくない現実を突き付けられそうで……

自分でも情けないと思つ。

けれど、俺は漫画や小説の主人公みたいに勇敢なわけでもないし、ましてやこの自分の状況を何とも思わないほど鈍い訳でもない。

いたつて普通な高校生だ。

少なくとも自分ではそう信じている。

なら、これぐらいは当然の考え方だと思つ。

情けなかろうがなんだろうが、俺は怖い。

この状況が、この場所が、人が、風が。

自分が生きている」とさえも

恐怖。

恐怖。 恐怖。 恐怖。 恐怖。

右も左も上も下も縦も横も前も後ろも。

全てが混ざり合ってぐるぐるぐるぐる。

頭がおかしくなりそうだ。

靈夢さんはそんな俺を見て、未だ口を開じていた。

先ほどの複雑そうな表情から一変、黙つて いる俺の顔を凜とした表情で見据えている。

「…………なんで答えてくれないんですか？」

「私があなたの質問に答える義務はないもの」

そういう彼女は甘えを許さないと言わんばかりにあつぱつと語る

捨てる。

「それに本当は理解しているような顔をしている奴に何か言つのも時間の無駄だと思わない？」

靈夢さんは何処となく氣だるさつな面持ちでしゃべった。それはどうこつことなのだろうか？

いや、俺は本当は心の中では理解しているのだ。でも、納得できないだけの話なのだと思う。それは何処までも自分勝手で何処までもはた迷惑な話なのだが……

仕方ない事だと思う。俺は非常識に焦がれていてもその身はどうぶりとこれでもかと言うぐらいに常識に浸かってきた存在なのだ。

簡単に受け入れられるはずがない。この今いる世界が自分の生きていた世界とは違い、俺の持つ常識が当てはまることのない場所であることなどと。

信じられない。自らがそんな妄想にも近いことを考えているなんて、認めたくない。だからこそ、口に出さないのだ。

自分で口にしてしまえば、その根拠もない妄想を自分で肯定してしまう。そんなものはたまらなくみつともない。それなら、他人からどんな内容だろうが説明されたほうが幾倍もまし。

訳の分からぬ状況で俺が答えを先延ばしにし、今も沈黙を保つているのも結局はこんちつぽけな矜持のためだつた。

自分でもなんかすごく人間小さいなと感じるが、俺は「ぐく一般的な人間だから。それが普通でそれが当たり前。

「ううは」

けれど、それは正しいかと聞かれれば否。そんなことはない。だってそれはただの逃げだから。

この状況で戸惑いも不安も絶望すらももちろんある。だが、前に進むことをやめるのはそれだけで罪だ。

葛藤。選択。反省。また葛藤。人間、いやヒトはそれを繰り返さなければ何もできない存在。

その放棄はただの歩く屍。生産性のない肉の塊。

そなんだ。だから、俺は分からないなりに前に進まなくてはならない。一度折れかけた心を叩きなおして、先の情けない弱音の続きを飲み込んで。

「幻想郷って言つ異世界で間違いないんだな」

前へ進もう。

「ええ、その通り。ここは幻想郷。あなたみたいな境遇の人から見れば、ここが異世界つてのも見方としては正解。なにより、ちゃんと頭も回るし会話できるんじゃない」

俺の言葉に靈夢さんは肯定の言葉をかけると、軽く頬を緩ませた。

そのあまりにも自然な笑顔を顔を上げて真正面から見た俺は顔が少し熱くなるのを感じた。

何というか先ほどまでいろんなことがありすぎたから、彼女の顔をしつかり見る機会がなかったせいもあるがこう見ると彼女は相当な美人である。

そんな美人の笑顔を目の前に妙に恥ずかしくなり、顔が火照ってしまう。

「いや、まあ、訳の分からない状況について少し俺も混乱してたからね」

と愛想笑い付きで何とか「まかし、慌てて湯呑を手に取ると少し冷えてしまったお茶を一気に流し込んだ。

「とはいえ、まだ混乱していることに変わりはないよ。何故俺がこんなところにいるのかとか、何故あんたが俺を異世界の人だと判断したのかとか……何故俺は生きているのか……とにかく

「そうね。下手な同情はしないけどあなたのその感覚は至って正常なものよ。ひとまずあなたの頭がイッちゃてないことに私は一安心よ」

「初対面で悪いんだけどさ、あんた何か可愛げないよな」

「失礼ね。私なんて可愛さの塊みたいなものよ」

「出合った頭にルーミアをブツ飛ばした奴が言つ口調ではないよな、それ」

何だか会話をするうちに変な硬さも解れてきた。混濁していた思考も徐々になつかつてしまっていく。

「さて、じゃあこの世界についてある程度説明をしておきましょうか。それから、あなたの今後を検討しないとね」

そう言って、彼女はまた頬を緩ませた。そんな彼女の笑顔に俺も頷きと回じように微笑みを返した。

「さて、じゃあまことに何から話そつかしら？ 何かリクエストとかつてある？」

取り敢えず彼女は出来るだけ親しみやすい口調でいつ切り出した。

俺の気持ちが完全に吹っ切れたわけでもないし、厳密に言えば俺の葛藤は何も解決していないのだけれど、彼女はそんな俺に発破をかけるかの『ごとくその切り出しかたを選んだ。

別にそれを不快に思うでもなく、ただただ彼女のその身の変わりようには呆気にとられた俺は無言で首を横に振った。

「じゃあ、取り敢えずは幻想郷のことについて説明するわね。あなたも言った通りこの世界はあなたがいた世界とは違う異世界だつて事は話したけれど、厳密に言えばその言葉は間違いよ」

靈夢はせつて正座を崩す。正座が苦手のかいたた、と呟く。

「この世界は文字通り『幻想の郷』。あらゆる世界において『幻想』となつた存在が流れ着く、いわば忘れ郷みたいな場所なのよ。だから、あなたの世界と異なつた世界と言つよりは、裏の世界と言つた方が表現としては正しいかもね」

なるほど。そう言われれば何かと納得が出来る気にはなる。

そんな不思議な場所なら、俺は死んだことによつて幻想になつたと考えれば一応の筋は通るからである。まあ、そんな簡単なことでもないような気がするが……この理屈なら死んだ人みんなここにいることになるしな。

「幻想ね……それつて俺の世界で非常識と思われてたことがこの世界では成立していゆつてことに……なるのか？」

「そうね、魔法使いとか妖怪とか亡靈とか拳句の果てには吸血鬼や死神なんてのがこの世界にはいるし」

「うわ、なんか聞きたくなかった。まじでそんなファンタジー満載な世界に来ちましたのかよ」

何となく予想をしていたとはいっても、思わず頭を抱えてしまつた。非常識に憧れていたとはいっても、ござ直面した時には人間なんてろくな行動が出来ないもんである。

「ちなみに言つておくけど、あなたの隣にいるルーニアは妖怪よ」

「はあー!？」

そんな突然のカミングアウトに反射的にルーニアから距離を取つた。当の本人と言えばいきなり動き出した俺を湯呑を傾けながら首を口テンと横に傾げ、心底不思議そつな顔で俺を見ていた。

「どうしたの？ パパ。お話終わったのなら食べていい？」

「いや、決してよくないから。そして、そのパパってのはやめやめなさい。俺の性癖が疑われる可能性があるから」

「…………？」 そう呼んでつて言つたのはパパでしょう？

「話をするやうであるだけじゃありません！」

靈夢の視線がじんじん冷めていくのを感じる。たゞがにこれは精神的にきつすぎる。これ以上話が流れるのは命（主に社会的な）が関わつてくる。

「や、それじゃあこの子は本当は妖怪で、一人でふらふらしていた俺を腹になしに喰おうとしていたつてことなのか…………？」

「ま、やうやくね。それを考へれば私の話も現実感を帯びるでしょの？」

「確かにこの上なく説得力がある」とは否定しないが……。

と、ため息をつきながら天井を仰ぐ。何だか納得もできるし、自身の身に起こった事を否定するつもりもないけれど、妙に現実とは未だ感じられないというか、たくさんの分からない事ばかりが起こつて、どこかボケてしまつて変にほんやりしている。

まるでもやの中で何もせず、ただただ突つ立つてゐみたいだ。ここに何か目的をもつて来たわけでもないし、ここで何かをしたくなつたわけでもない。

そうだ。俺はまるで今抜け殻みたいになつてゐるかもしれない。燃え尽き症候群といふか、一度生を終えてしまつて、何かをしようと言つ感情が抜け落ちてしまつてゐるかも知れない。

だから、自分を喰おうとした異質な存在が傍にいたとしても、怖がりつつも普通に会話が出来ているのだらう。

「わつこえぱ・・・・・・

と、俺が呆けていると靈夢が何かを思い出したよつて声を上げた。

「どうした？」

「あなたの名前を聞いてなかつたわ。あなたもさすがにさうとあなた呼ばわりは嫌でしょ？」「

「ああ、そうだったな。俺は神部黒央。よろしく、靈夢……
さん?」

「靈夢でいいわよ。私も黒央って呼ばせてもらひつかり」

「ん。じゃあ、取り敢えずお互いの名前も知ったところだから
俺はどうすればいいのか考えなけりやならない。そこでこの世界の
事をもっと詳しく教えてほしいんだが」

「ええ、いいわよ。まあ、それも私の仕事のよつたもんだし」

そう言って、俺達は再び話を始める。まあ、色々思つとこひはあ
るが取り敢えずやることをやってから気持ちに整理をつけることに
しよう。

約一時間後

俺達は互いに自身の状況、境遇、そして持つている情報を交換また
は提供し合つた。

靈夢から聞いたこの幻想郷の情報は想像していたより膨大だった。

まず、幻想郷内の地理。主だった場所である、博麗神社、永遠亭、紅魔館、人里、魔法の森、妖怪の山、冥界などなど。様々な場所が複雑に点在しており、中にはどこにあるのか分からぬが存在が確認されているといった摩訶不思議な場所まであつた。さすが、名前負けしない世界である。

取り敢えず名前だけでも覚えておいて損はない。靈夢はあらかたの場所とその場での簡単な注意を俺に聞かせた。

次に、この世界における多種族との関係性である。先の会話にもあつたようにこの世界には人間だけでなく、妖怪、妖精、亡霊、魔法使い、その他幻想種に該当する伝説上だと思われていた人外が存在する。

基本的には関係性としては弱肉強食の世界。弱いものは糧となり、強いものが喰らう。そんな、何ともシンプルかつシビアな関係性。

ゆえに妖怪などに比べ、地の力が弱い人間は圧倒的に弱い立場にいるのだが、それを力バーするように入里には守護者と呼ばれる者がいたり、あまりに多く妖怪側が人間を捕食した場合、この世界のバランサーとしての役目を担う『八雲家』、そして『博麗の巫女』がその帳尻合わせをしているとのこと。

しかし、それでも手が回らない場合に発揮されるシステムが『スベルカードシステム』と呼ばれるもの。

これは明らかに実力の差があるものが戦闘を行う場合、両者の合意のもとスペルカード（いわば必殺技みたいなもんらしい）と呼ばれる護符を使いその美しさ、そして致死量に満たない『弾幕』と呼ばれるエネルギーの塊（？）みたいなものをどれだけ被弾させられるかといった勝負である。

この勝負によつて妖怪に一方的に殺されてしまう人間はいくらか減らせるとの事。ただ、このスペルカード……使用者の力の大きさが反映されるため、強大な力を持つ者のスペルカード（または弾幕）はシステムなど無視して対象者を殺してしまうこともあるらしい。

何というか穴あきだらけのシステムだが、これで幻想郷は今のところ順調に回つてはいるようだ。

そして、幻想郷の実力者に共通する『能力』のことについても教えられた。

この幻想郷において実力者と呼ばれる様々な存在。それらのほとんど全てはその個人だけの特殊な力を有しているらしい。それをひとつくくりに能力と呼ぶらしい。

因みに靈夢にもルーミアにも能力があるらしく、興味本位で聞いてみると……

「なんでわざわざ自分の力をひけらかすようなまねしなきやなんないのよ。もしかしたら、あんたが敵になる日も来るかもしれないし

ね

「ルーミア、どうした？」

と、靈夢からは何やら物騒な言葉をルーミアに至つてはどじょうひみつじいだよつもない言葉を聞かされ、素直に引き下がつた。まあ、靈夢の言いつことはもつともであるが、心なし少しショックである。

とまあ、聞かされた大まかな幻想郷の情報はこんな感じだ。

そして、次に俺は自分の境遇を靈夢に話す。

この世界に来る前に起こつた非常識な出来事。その不可思議な存在に自分が一度命を奪われた事。一度失つた命がこうして甦り、またしてもルーミアに殺されてしまいそうになつた事。

俺が知りうる限りの状況を包み隠さず話した。

全てを話終わつた時、靈夢は腑に落ちないと言つた表情で俺の顔を覗き込んでいた。

「今の話が全部本当なら、どうも納得できない話になるわね

「まあ、にわかには信用できない話だよな。未だに自分でも半信半疑だし

「ああ、別にその話自体を信用してないって訳じゃないのよ

ただ、納得できないってだけだね……と、靈夢は言葉を濁す。

「私から言わせてもらえればその黒い塊とか、目覚めたら知らない場所にいたとかそういうの」非日常^(ノーノルマ)は「日常」なのよ。腑に落ちないのはそこじやなくて、”あんたは死んだはずなのに幻想郷^(イリヤクノシタ)にいる”って事

「でも、死んだって事は俺の存在が幻想となってしまったとも考えられる訳だろ？ なら、理屈で言えば俺がここにいるのも道理じゃないのか？」

俺の意見に靈夢は即座に首を横に振る。

「死は別よ。だいたい、その理屈でいつたら幻想郷の生き物全員死んでることになるじやない」

そうだ。先に自分が言つたことを忘れていた。やはり、この世界は死者の世界と言つわけではないようである。

「死は存在の消失よ。一個体としての生命がその躍動を止めてしまうこと。幻想は人々の記憶からその存在が消えてしまうこと。似たよう意外と違つてるのよねこれが」

とにかく、と靈夢は頬杖を付きながら続ける。

「あなたは少なくとも死んではいないのよ。死ねば今、じる魂だけになつて、三途の川を死神の漕ぐボロ舟で渡つているはずなんだから。あなたはちゃんとした肉体を持つて、三途の川、じこらか私の神社でじつして茶をすすつている。それが何よりの生きてる証拠よ」

「そうか……俺はちゃんと生きていたみたいだ。訳の分からぬ怪物に一方的に命を奪われただけではなかつたのだと彼女の言葉で今更ながらに安堵した。

「そうだ、俺は生きている。生きて今ここにいるのだと。世界は違えどもこの命が続いている事に変わりはない。」

「その事実が、なによりその実感が俺の胸を急激に襲つた。込み上げてきたものを必死に抑え、俺は靈夢を見据える。

「まあ、原因は分からぬけどよかつたんじゃない？ 死んだらそれまでだものね」

「ああ、本当にその通りだ」

「そう答えて不意に神社の開け放たれた襖へと視線を移す。そこには落ち葉一つ落ちていない殺風景な境内の様子があつた。

しかし、その光景には言葉では表しようのない神聖さを感じ取ること

とが出来た。何もない、ただそれだけの場所であるのにも関わらず、俺はその何でもない光景にこの数秒で目を奪われる。

ただ、それだけ。

ただ、それだけの事が俺の心からくすぶり続けていた不安を取り除いてしまった。

そして、俺は視線を戻し

「俺は 生きてるんだ」

そうほつときつと自分に言ひ聞かせるように呟いた。

「さてと、それじゃああなたの今後の話になるけれど

互いの状況確認、情報交換がある程度終わると靈夢は現在直面した問題へと話を移した。

「まあ、基本的な事を聞くが俺は元の世界には帰れるのか？」

「今すぐは難しいわね。黒央がこちらに来た理由は結局分からずじまいだし、こちらの世界から元の世界に戻るには博靈大結界をどうにかするか、手取り早く幻想郷を作った奴に頼んでみるかの二つに一つ。前の案はどうしても大がかりなものになるから最低でも一年ほどかかるてしまつし、後の案はあまりおすすめはできないし . . .」

「幻想郷を作った奴ってのは そんなにおつかないのか？」

「掴みどころのない娯楽を糧にするよつた妖怪よ。気に入らないって理由だけで喰われたくはないでしょ？？」

「やつや手に余るな」

となると俺は少なくともおおよそ一年ほどこちらの世界にいなくてはいけないことになる。

それは仕方のない事だし、あきらめるしかないだろう。それに不満を靈夢にぶちまけたところで、直接関わっていない彼女に関してみれば八つ当たりもいいところである。

そうなると、当面の生活場所と食事の確保が問題になつてくるのだが、この世界で頼れる人などいな俺にとつては中々シビアな問題だ。

野宿覚悟は仕方ないとしても、食糧に関しては何処で何が手に入るかなどの情報がこれっぽっちもない。何とかして、飲み水も確保していかなくてはならないし・・・・・・これは本格的にサバイバル生活だな。

「まあ、何とかなるかな・・・・・・？」妖怪とかに気を配りながらのサバイバル生活になりそっだけだ

「あら、別に神社には空き部屋が二まんとあるからそこを使ってくれてもいいのよ？」

「もちろん俺としてはその方が大助かりなんだが・・・・・・ただでさえ恩義のある靈夢にこれ以上迷惑をかけるのは気が引けるつていうか・・・・・・」

「なら、この一年間でその恩を少しづつ返してもらえばいいわ。それにこつちは半分仕事のようなものだし、何かと男手があると助かりそうだしね」

今のところ一番の解決法というか収まり所は確かにその案なのだが、それが本当に自分のためになるのかと考へると、どうにも快く賛成することが出来なかつた。

別にもつと快適に過ぐせるところがあるんぢやないかとか、そういったことを言つてゐるのではなく、この世界で生きていくにあたつての自分の心の持ちよつの問題である。

恐らく靈夢の神社に世話になれば、安全で快適な生活は保障されるに違ひない。ルーミアの件で靈夢の力の強さは素人目から見ても、十分強いことが分かつたし、そんな人が傍にいるならば一年間無事に命を落とすことなく生きていける可能性は飛躍的に跳ね上がるだろつ。

しかし、それで本当に自分は靈夢に恩を返すことが出来るのか . . .
. . . 答えは否だ。例え、靈夢の身の回りの管理を俺が一手に引き受けたとしても、命を救つてもらうことへの借りには決して及ばない。

自分に何の力もなく、この世界に蔓延る幻想の存在に太刀打ちなどできないことはとうに分かつている。

しかし、それを理由に自分が何もせず他人に縋り付くのは人といががなものかと思えてならないのだ。

何も力がないからこそ、何の当てもないからこそ、俺はこの世界で多くの人外から自分の命を守り抜くために必死にならなければいけないはずなのだ。

たまたま今回は運良く靈夢と出会つただけで、本当なら俺はある場でルーミニアに喰われてもおかしくなかつたのだから。

だからこそ俺は自分の力を最大限活かしてこの世界を一年間生き抜かなければならぬのだ。

「申し出は嬉しいけど……やつぱり俺は靈夢の世話になるべきじゃないと思うんだよ。恩を返しきれないかもしれないとか、そんな貸し借りの理屈だけじゃなくて、結果的にとはいえ俺自身の問題に他人を不用意に巻き込むのはやっぱり気後れするしな」

「その心がけは立派よ。けれど、幻想郷はあなたが思うほど楽に生きられる場所じゃないわ。昼も夜も妖怪や妖精、性質の悪い幼獣が自分を生かすために、楽しむためにあなたのようない力のない獲物を待ちわびてゐるの。対抗する手段…………それも相手の命を奪えるほどのものがなければ抵抗もできずにぼろきれのように殺されて終わりの世界。そんなところであなたはどうやって自分の力だけで生きていこうと考えてるわけ？」

そつまつ靈夢の表情は厳しかつた。俺の顔を真剣な眼差しで見つめ、妥協を許さないような厳格な雰囲気を醸し出している。

「確かに俺には何の力もない。けど、最低限の事は自分でしないと気が済まないんだ。言つなれば、ちょっとした男の意地みたいなもんだよ」

「呆れた。意地で命を捨てるつもり? 男ってよく分かんないわね」

「ほんと 分かんねえよな」

俺は靈夢の言葉に苦笑を浮かべながら、そう言い返す。本当に自分でもそう思つ。男は不便な生き物だよ、例えこの選択で命を落としたとしてもそれでもいいと思てしまつのだから。

いや、もしかしたら俺はこのぶつ飛んだ現状のおかげで頭までぶつ飛んでしまつたのもしれないが

俺の苦笑交じりのその答えに靈夢はあきらめぬかのようにため息を吐いた。

「はあ ま、何もせずに文句ばっかり垂れる奴よかマシ

か。取り合えず、黒央の言い分は理解したわ。けれど、あなたの言い分通りにすることは残念ながらできないわ」

「なつ…………！」今まで言つてもダメなのかよ」

「ダメもダメ、ダメダメよ。まず、せつかく私が救つた命をそんな簡単に捨てるような真似は私が納得できないわ。それに……」

「

そこまで言つて、靈夢は少し口を閉じ、何処か恥ずかしげな表情を浮かべ

「見づ知らずの人間を見捨てるほど私は薄情じやないもの」

そう言い切つた。

「靈夢つて…………意外に人情深いんだな」

「…………つー？　ああもつー！　こんなこつ恥ずかしい事言つんじゃなかつたのわ！　というか、知り合つて数時間しか経たないあんたが私の何を知つて”意外”なんて口にするのよ！」

靈夢は恥ずかしいのかわざかに頬を紅潮させると、自分の田の前の湯呑を手に取るや否や俺めがけてぶん投げてきた。

「お、おこー、いらっしゃなんでもあぶねえだろ？」「

「うわわー、第一、そんな理由抜きにしてもあんたには私に返さなきやならないでつ、かい借りがあるでしょうが！ それを全部清算するまでは神社で延々と下働きしてもうわなきや勘定が合わないわー。」

靈夢は一気にそつ捲くし立てる、不機嫌そうに立ち上がり部屋から出て行った。

突然の事に少し呆気にとらえながらも、俺は氣づくと笑みを浮かべてしまつた。

彼女の精一杯の照れ隠しがあまりにもおかしくて。

「ねえ、なんで靈夢はあんなに怒つてたの？」

その一部始終を見ていたルーニアが不思議そうに俺に訪ねてくる。

「さあな、でもこれだけは言えるぜ」

「…………？」

「女はよく分かんねえってことだよ」

「変なパパ」

「パパはやめなさい」

「うひて、俺はこの幻想郷の博靈神社に居候させてもひつ身の上となつた。」

まあ、かなり不安は大きいが何とかしてやつてこべりとこじょり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1053s/>

東方光闇録

2011年11月27日21時52分発行